

特集 三浦綾子の言葉にきく

- 2～3面 クリスマスメッセージ
難波真実(牧師・三浦綾子記念文学館事務局長)
- 4面 エッセイ「剣によって滅ぶ」三浦綾子
- 5面 読書案内 いま読みたい4冊
- 7面 国際平和デー報告

The Young Women's
Christian Association

YWCA

12

DECEMBER
2022

No.771

〈第33総会期主題聖句〉

平和を実現する人々は幸いである
—マタイによる福音書5章9節—

〈ビジョン〉

女性がリーダーシップを発揮し、
人権・平和・環境を大切にする社会

〈ミッション〉

若い女性をエンパワーし、共に社会変革を進めます。

〈バリュー〉

キリスト教基盤 平和・環境 人権 セーフスペース

www.ywca.or.jp

道のかなたに、
光をもとめて

『氷点』や『塩狩峠』で知られるクリスチャン作家、三浦綾子。

戦争の愚かしさや権力の恐ろしさを訴え続けた反戦の作家でもあった。

キリスト教を基盤に平和の実現を目指すYWCAは、綾子と同じ地平に立っている。

世界中が戦争に翻弄されている中で迎えるこのクリスマス、

生きていたら100歳になった作家の言葉に耳を傾けてみたい。

「光あれ。」を 握りしめて生きる

Christmas
Message

日本基督教団牧師・
三浦綾子記念文学館事務局長

なんばまさちか
難波真実



「闇の中から響く声」

「光あれ。」

燭台に立てられたロウソクに火を灯すとき、私の心にはこの言葉が迫ってきました。キリスト教会では、クリスマス待ち望む期間として「アドベント（待降節）」という4週間を過ごします。日曜日ごとに一本ずつロウソクに火を灯し、クリスマスの週には4つの灯りが周りを照らします。小さな火でありながら、私の心に感動を呼び起こしているのでしょうか。すつと引き込まれる瞬間です。

「光あれ。」

この言葉は旧約聖書「創世記」の一章に記されています。普段は天地創造の物語として読むことが多い場面です。クリスマスとは直接関わりがないようにも思えるのですが、ロウソクに火を灯すその瞬間と、この言葉が組み合わさることで、

クリスマスにぴったりだと思うようになりました。

「光あれ。」

私はこの言葉に「祈り」が込められているように感じます。聖書が編まれた頃の遠い遠い昔からの、その時代その時代を生きた人々の切なる祈りと願いです。おそらく、どの時代も、特にこの天地創造物語が文字や文章として形になっていくその時期、人々は光を欲していたことでありましょう。「私たちは何者なのか」「何のために生きているのか」「なぜこんな目に遭うのか」「いつになったら平和で幸せな日々が訪れるのか」、誰にもその答えが見いだせない、まるで闇のような暗さの中にあつたのではないかと思うのです。神が発したこの言葉は、神の声であると共に、受けとった自分たちの声でもあって、それは心からの切なる祈りとして共有されたのではないか、そして時

代も国境をも超えて、綿々と受け継がれてきたのではないか、そのように思えるのです。

「光あれ。」

私も、現在のこの世界に生きる一人として、この言葉に祈りを合わせます。人類が歩んできた長い年月において、私たちはどれほどの愛と命を生み出してきただろうか、反対に、どれほどたくさんの愛と命を失わしめただろうかと、私たちは人類に与えられた希望と絶望の両方を思っています。

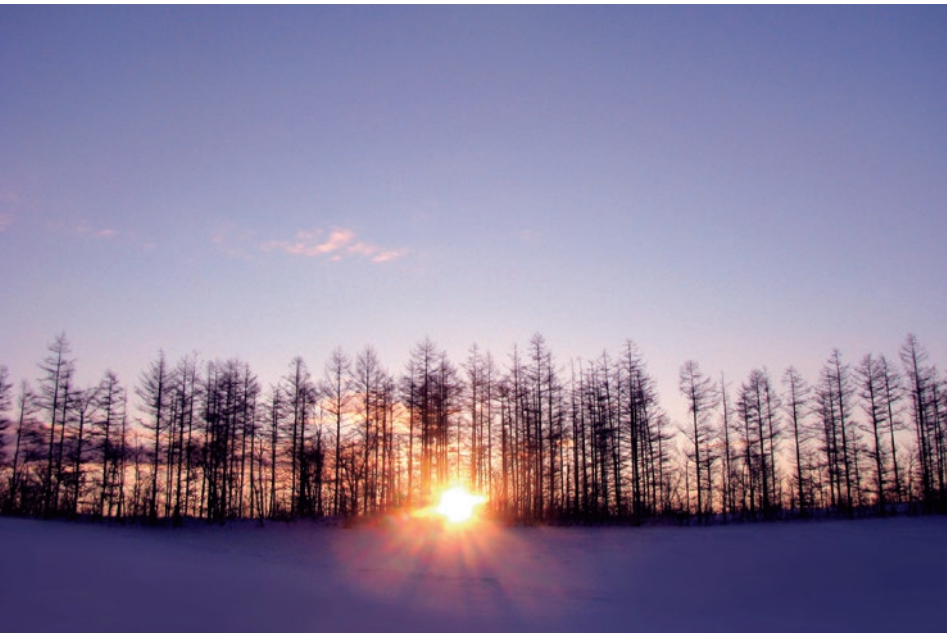
今なお続く紛争、差別、貧困、環境破壊は、私たちに無力感を植え付けようと、絶望の淵に追いやるうとします。「私たちにできることはない」と思わせ、沈黙と服従を強制するその圧力は、人が人として存在することの意味そのものを奪ってしまう暴力です。

「光あれ。」

この言葉は、その暴力の前に打ちひしがれてしまいそうになる私たちに向けて発した、神のエネルギーなのではないか、私にはそうも思えるのです。あなたがたが必要とするのは、光だ、明日を信じる力だ、生きる希望だ、この言葉を握って生きていきなさいと、神が与えてくれた言葉だと、私は信じます。

「三浦綾子の祈り」

北海道旭川市にある三浦綾子記念文学館で私は働いています。三浦綾子という作家もまた、「光あれ。」の言葉を大切に握りしめていた一人であつたと思います。なぜなら、光のないときを過ごしていた、そういう人だからです。彼女にとつての「光がない」とは、生きる意味が見いだせないということ。小学校教師をしている最中に第二次世界大戦が終わり、敗戦国となつた日本。皇国と信じ疑わなかつた彼女に突きつけられた光景は、GHQの司令による、教科書への墨塗りでした。幼い小学生、愛する教え子たちに墨を塗らせる彼女は、何を間違つたのか、彼らにどう詫げればいいのか、どうやって責任をとればいいのか、誰に聞いても教えてもらえず、どんなに考えても分からず、



ただただ、墨を塗らせていました。おそらく、その墨は闇となって、彼女の心を真っ黒に塗りつぶしていったことでしょう。答えが見つからずに教師を辞めてすぐに肺病になった綾子は、そんな自分に「ざまあみろ」と悪態をついて、自分の命を絶とうとしました。

しかし神は、打ちひしがれた彼女をそのままにはしておかれませんでした。自

暴自棄になった彼女のそばに、寄り添い、支え、立ち直らせる人を置いたのです。その人は神の言葉を信じ握りしめていた人でした。その信仰が、綾子に生きる希望と力を与えました。何かを信じることに絶望した綾子でしたが、もう一度、信じる力を得たのです。神の言葉に裏打ちされた人の真実と愛が、闇に輝く光となって、彼女に生きる道を指し示しました。

人は簡単に光を失います。そもそも光を持っていたのか疑わしいほどに弱さを覚えます。あつけないほどです。「わたしは何なんだ」、「このまま生きていいのか」、「こんな人生、無駄でしかない」。いともたやすく自分の存在とその意味をあきらめてしまふ、そういう性質を持ち合わせています。

三浦綾子は、人間とはそんなものだ、決して強いものではないと、自身の体験を通して知っていました。だからこそ、

人が生きていくには言葉が、自分を成り立たせる言葉が必要なのだと言っていたのでしょうか。そして祈り続けたのだと思います。「光あれ。」と。

言葉をください

三浦綾子が著した作品はたくさんありますが、特に最後の長編『銃口』は、叫びです。まるで絶叫です。「光あれー」と、無我夢中で叫ぶ彼女の姿が目につかぶようです。闇が社会を覆い、だれもが自分の言葉を失い、光を失ってしまう世界。そんなつもりはなかったのに、いつの間にか、人が人に、自分がだれかに、だれかが私に殺意（銃口）を向ける、そんな世の中になっていったことへの驚愕と恐怖。その愚かしさと嘆きが、物語に凝縮され、読む私たちの胸に突き刺さってきます。

「光あれ。」

失意と絶望の真つただ中にある私たちに何ができるのか。『銃口』で三浦綾子は、坂部久哉にこんな言葉を語らせています。

「しかしな竜太、どんな時にも絶望しちゃいけない。四方に逃げ道がなくても、天に向かつての一方だけは、常にひらかれています。（略）絶望してもいい。しかし、

必ず光だけは見失うな。」

（『銃口』『最敬礼』の章より）

八方塞がりとも思える、あきらめしかないような状況を打開するにはどんな方法があるのでしょうか。答えの見つかりそうにない難題に対して、綾子は「光を見失うな」と答えました。それはつまり、私たち人間に生きる意味と力を与えるはずの神に、「言葉をください」と祈りなさいと語っているのです。

「初めに言（ことば）があつた。言は神と共にあつた。言は神であつた。」

聖書の「ヨハネによる福音書」一章にあるとおり、その「言」がキリストとしてこの世に降誕した、「すべての人を照らす」まことの光が私たちのところに来た、それがクリスマスです。だから、教会ではクリスマスを祝うのです。拳を握りしめ、肩をふるわせて涙を流すほかに、そんな弱さの中にある私たちができることは、生きる力となる、神の言葉を待ち望むこと。神の愛が、かたちとなつて私たちと共にある、それが信じられるということ、それがクリスマスの喜びです。

「光あれ。」

心を込めて、メリークリスマス！

平和を実現する者として

ロシアによる軍事侵攻から始まり、世界中が戦争に翻弄された1年の終わり。

非核・非暴力による平和の実現を目指す日本YWCAは、このエッセイを皆さんと共有します。

1982年、「平和のために今、私たちは何を考えるべきか?」と呼びかけた大学生のために、綾子が寄せたメッセージです。

「剣によつて滅ぶ」

三浦綾子

戦争中、私は人間ではなかった。人でなしであった。なぜなら、私は軍国主義に染まった教師であつたからである。私は生徒に、国のために戦うことを、人間の第一になすべきこととして教えた。全国の教師が教えたように、熱心に教えた。私は人でなしであつた。

今、核兵器の完全禁止を人々は叫んでいる。私も叫んでいる。だが私は、ちよつと立ちどまる。核戦争反対だけを叫んでいるような危惧を感じるからだ。過去において、日本は誤つた戦争を起こした。いや、戦争に誤りも正義もない。戦争はすべて、全面的に誤りである。軍国主義教師であつた私は、そのことを痛感している。

私たち女性には、文字どおり命を生み、命を育てる。生まれ出た子供に乳房をふくませながら、女性はわが子に何を望んでいるだろうか。わが子が、人を殺め、傷つけることをねがう母親が、どこにいるだろう。いかなる理由をつけても、人が人を殺すことを認めてはならない。そのことを女性たちは知っている。男性もまた、それを知らなければならない。日本人が日本人を殺すと犯罪になり、他国人を殺したら荣誉になるという、そんな馬鹿な理屈はない。いかなる人間にも、人間を殺す権利はなく、殺せと命令する権利もない。人間が人間を尊重するということは、とりもなおさず、人間の命を奪つてはならないということである。

私はキリスト信者である。キリストは決して、国のためなら人の命を奪つてもよいとは言わない。キリストは「汝の敵を愛せ」と言った。「剣を取る者は剣によつて滅ぶ」と言った。この滅びは、命の滅びのみならず、人間性の滅びを意味する。私は核兵器はもちろん、拳を持って殺すことにも反対する。

徴兵は命賭けても阻むべし母・祖母・おみな牢に満つるとも

某新聞歌壇にあつたというこの短歌を、全世界の人に贈りたい。

出典：『国を愛する心』小学館新書（2016年発行）

※短歌は朝日新聞(1978年)に掲載された石井百代(当時75歳)作 ※エッセイの初出は全国大学生協組合連合会「PEACE NOW!」1982年4月1日

三浦綾子記念文学館

1998年、全国のファンの寄付により旭川に開館。作品の本質を広く伝え、また心の糧として次世代へと継承することを目的に多彩な発信・展示を行う。



三浦綾子（みうらあやこ）

1922年、北海道旭川市生まれ。高等女学校卒業後、17歳から7年間小学校教師を勤めるが、太平洋戦争後、罪悪感と絶望を抱いて退職。その後、肺結核と脊椎カリエスを併発して13年間療養生活を送る。闘病中キリスト教に出逢い、52年に洗礼を受ける。59年、三浦光世と結婚。64年、朝日新聞の懸賞小説に『氷点』で入選し、作家活動に入る。単行本化された『氷点』はベストセラーとなり、一大ブームに。その後も数多く小説、エッセイ等を発表。次々と病に冒されるが、光世の口述筆記で執筆を続ける。「昭和と戦争」を伝えるため最後の力を振り絞り『母』『銃口』を書き上げ、1999年、逝去。



三浦綾子を読む

この時代を
生きるために

読書案内

田中綾

(三浦綾子記念文学館館長)

不倫、復讐、嫉妬、猜疑……
心の奥底の「罪」をあぶり出す

『氷点』(角川文庫ほか)

三浦綾子の小説は、短編も含めて55作品です。そのどれもが、中学生から読める平易な言葉で書かれ、若い読者からも「読みやすい!」と感想をいただいています。ストーリー性に富む現代小説はじめ、モデル小説、大河小説、自伝的小説がありますが、いずれも、「ひととはどのように生きていくのか」と、読者に問いかけてきます。読者は「自分ごと」として考えながら読み進められることが大きな魅力でしょう。ほかに、42歳でデビューした遅咲きならではの懐の広さ。登場人物一人ひとりが丁寧に作られ、使い捨てキャラがないこと。さらには、名言・名セリフの宝庫であることも、長く読み継がれている理由と思われます。私自身、何度読んでも元気をもらっています。どんなに心が折れそうなことがあっても最後には救いがあると示してくれるところに、生きる力をいただいている気がします。そんな作品の中から、この時代を生きるためにお勧めの4冊を紹介します。

コロナ禍の3年間を
過ごした若者に

『泥流地帯』『続泥流地帯』(新潮文庫ほか)

コロナ禍で「空白の三年間」を過ごしたと嘆く高校生や大学生に、特

に勧めたい小説。旧約聖書の「ヨブ記」を下敷きとし、感染症や天災など突然の苦難に対する「心の防災教育」ができる作品でもある。1926年、十勝岳噴火泥流災害で、144名の命が奪われた。祖父母を失った貧しい開拓農家の兄弟が、復興に打ち込む真摯な姿が、恋愛もからめて描かれている。「全く何の見返りもないと知って、苦勞の多い道を歩いてみるのも、俺たち若い者のひとつの生き方ではないのか。自分の人生に、そんな三年間があったって、いいじゃないか」はじめ、10代、20代に刺さる名言も満載。

戦国女性の人生に
現代の問題を見る

『細川ガラシャ夫人』(新潮文庫ほか)

初の歴史小説。戦国時代、明智光秀の娘・玉子(ガラシャ)の運命に重ねて現代の問題点も可視化させ、新たな読みへと誘う作。たとえば、①ルッキズム(外見にもとづく差別)への警鐘、②身分制度や性による差別への疑義、③弱肉強食を当然とする戦国の世の価値観への問い、④地域社会の価値の見直し、などが描かれている。本能寺の変の後、玉子は、暗殺を恐れて2年間山村に隠れ住むが、そこで初めて「人を殺すことを学ぶ必要」のない、のどかで

豊かな地域社会の存在を知り、驚く場面がある。ロシアのウクライナ侵攻の話題とともに、お子さんやお孫さんと語り合ってみては。

権力の非情さを
知ってほしい

『石ころのうた』(角川文庫ほか)

17歳から24歳まで、戦時下の7年間を教員として「少国民」教育にあたった綾子。その時代を振り返り、「石ころのわたしの青春は、何と愚かで軽薄で、しかし一途であったことだろう」と綴った自伝的小説。タイトルは「この人たちが黙れば、石が叫びだす」(ルカによる福音書19章40節)からとられている。「すべての石ころをおしつぶすブルドーザーのような権力の非情さを知ってほしい」と願って書かれた、平和へのメッセージ作でもある。

無料で立ち読みしよう!

三浦綾子記念文学館公式サイトで、
ほぼ全作品の冒頭が読めます。

文学館キャラクター・レイ

三浦作品はじめての一步
<https://www.hyouten.com/hajimeno-ippo>





私の出会った 三浦綾子



澄んだ空を目指して

神戸YWCA会員 寺沢京子

ある年の秋、神戸YWCAの平和活動グループの仲間と共に、旭川の三浦綾子記念文学館を訪れました。私はまず、美瑛川のほとりの外国樹種見本林の景色に魅せられました。高くそびえる木々、澄んだ空気、静かな小道……。三浦綾子さんの心の風景に重なるような気がしたのです。

綾子さんの作品に『母』という小説があります。『蟹工船』を書いたプロレタリア作家、小林多喜二の母の生涯を描いた作品です。三年前、神戸YWCAのチャペルで、俳優の河東けいさんの「ひとり語り」による『母』を上演してもらいました。

多喜二は思想犯として捕えられ、築地署で惨殺されたのです。常に弱者の側に立ってきた優しい多喜二が、なぜこんな目に遭わねばならないのか？ ひどい拷問を受けたと判る息子の遺体を見て、母が発した言葉「ほれっ！ 多喜二！ もう一度立って見せねか！」には、思わず涙がこぼれました。怒りで震える叫びなのです。綾子さんと同世代の河東さんは九十歳を超えても『母』をライフワークにされています。その根底には「自由のない時代を繰り返してはならない」という強い思いがあるとのことでした。

あれから3年たっただけなのですが、ずいぶん年月が流れた気がします。コロナ禍、ロシアのウクライナ侵攻など世の中に不安感が漂い、厚い雲に覆われているような日々だからでしょうか。戦争報道に接する度に、戦争はいったん始まると終わることがいかに難しいか、を痛感します。

綾子さんはクリスチャンとして、常に弱者の側に立ち、平和を希求する作品を生み出してこられました。美瑛川のほとりにそびえる木々のように澄んだ空を目指して……。私たちも見習いたいと改めて願っています。



『母』 角川文庫

『塩狩峠』の思い出

横浜YWCA会員 渡辺洋子

懐かしいお名前です。学生時代の一時期、三浦綾子さんの小説を一心に読みふけていました。実は、もともと関心があったわけではなく、同じクリスチャン作家である曾野綾子さんと混同しそうな印象しかありませんでした。それが、たまたま手に取った『塩狩峠』を軽い気持ちで読み始めたところ、一気に小説の世界に引き込まれていきました。先の展開が気になって授業中なのについ読んでしまい、ボロボロと泣いてしまったこと、そんな私を見た先生が心配して席の近くまで来られたことなど、恥ずかしさと共に思い出されます。

もう昔のように純粋でなくなってしまった自分は、今読み返してみても、もちろん胸が熱くなりますが、それでもあの頃のようにボロボロとは泣くことはありません。やはり若かった私の心に響く作品だったのでしょう。

主人公の信夫のように清廉潔白で善い行いだけをする人に対して、人はともすると、信夫の友人の三堀のようにうがった見方をしてしまいがちです。たぶん自分もそうだと思います。でもそのような曲がった考えを跳ねのけて、この年をとった私でさえも胸を打たれるのは、すべてを神にささげている信夫の純粋さの故でしょう。最愛の恋人との結婚も、自分の命さえも、神の前に投げ出して他者の命を助けるという犠牲の精神。何度読んでも、その精神に感銘を受けます。

ユースの方たちには、ぜひ若いうちに一読することをお勧めします。若い心にしか感じられないものがあるはずです。また、私のようにかつて読んだ人もこの機会に再読してはいかがでしょうか。心が洗われるような気持ちになると思います。



『塩狩峠』 新潮文庫



オンライン国際イベント報告

世界の仲間と出会い、共に平和をつくろう

いま、YWCAではオンラインによる国際イベントを頻繁に開催しています。世界の仲間とつながり、絆を深める絶好の機会といえます。国連国際平和デーには日本YWCAがイベントを主催しました。日本YWCA国際部の新人職員が報告します。

from

日本YWCA国際部

▶その声を世界へ届けましょう！

国際の仕事には頭を悩ませられます。反省する日もあります。それでも、YWCAの理念のもと、新たな価値観や知識に触れるとき、楽しさとやりがいを感じます。

人が集まれば、その数だけの思想があり、「これを話したい」ときは話す言語の上手下手よりも、その人の経験に基づいたメッセージ性が大切です。機関紙を読む皆さんの経験や思想もまた、とても貴重なものです。その声を、一緒に世界へ届けたいと思います。

日本 YWCA 職員 畠舞衣子

▶つながることで自分が見える

私が国際の仕事をしたのは、ちょうどロシアによるウクライナへの侵攻が始まったころでした。戦争や災害が起きたさまざまな各国 YWCA と連絡を取り合う中で、平和、人権、女性というテーマで YWCA が果たすべき役割や、今後の方向性を少しずつ理解することができています。国際プログラムなどの業務を通して、「平和」という言葉の重さを実感しています。

世界の仲間とつながることで、自分たちがどこにいて、どこに向かっているのかを気付くことができます。今後より多くの会員が、国際プログラムに参加できるようになればと思います。

日本 YWCA 職員 鄭依楚

対話によって個人のつながりを深めた

毎年9月21日は国連が定める「国際平和デー」です。日本YWCAはこの日、世界中のYWCAに呼びかけたオンライン国際イベントを開催しました。今回のねらいは、これまでの国際イベントでの取り組みをふまえて、各国・地域のYWCA会員同士が「国・地域単位」ではなく、個人のつながりを深める対話中心のプログラムにするというものでした。6月から動き出し、国内の地域YWCA会員5名と共に、「プランニングチーム」を立ち上げ、イベントの進行、アイスブレイク、ディス

カッションのファシリテーター、国際協力呼びかけの企画・運営を行いました。また、今回は海外YWCAに「話したいトピック」の募集も行った、宣伝にも力を入れました。当日は世界10カ国余り、合計33名が参加しました。日本や韓国といった「ナショナル」単位のYWCAに限らず、各国の地域YWCAの会員も多く参加。グループディスカッションの時間では、ミャンマーやパレスチナのYWCAのユースたちから、現地で起きていること、思いなどが共有されました。東京YWCA「国際語学ボランティアズILV」のメンバーによる通訳サポートのおかげで、日本と海外の参加者をリアルタ

イムでつながることができました。日本の参加者にとっては、世界の仲間とのつながりを感じながら、日本YWCAの活動を国際の舞台で共有できる貴重な機会となりました。また、海外の参加者にとって、自国の紛争など困難な状況を共有し、平和のために協力し合う良い機会となったと思います。毎度のことながら、最後まで調整・準備にトラブルはつきもので、欠席、飛び入り参加、人員不足などを潜り抜け、プログラムは無事に終了しました。

日本YWCAでは今後も、国際イ

ベントを開催していきます。参加に

ついて疑問や不安がある人は気軽に

国際スタッフまでご連絡ください！

エンパワーするNGO



2022年度クリスマス募金のお願い

日本YWCAは、日本全国・世界各地のYWCAとつながり、
弱い立場に置かれがちな女性や子どもを支援し、
その声を社会へ伝えるために活動しています。2022年のクリスマスを迎えるにあたり、
以下の3つの活動へのご寄付を心よりお願い申し上げます。

東日本大震災被災者支援募金

東京電力福島第一原子力発電所の事故から11年が経過しても、放射能被災による課題は「復興」の陰でそれぞれの生活の上に残されています。日本YWCAは、2011年のあの日生まれた子どもたちが20歳を迎えるまで支援を続ける決意のもと、東日本大震災被災者支援活動に取り組んでいます。コロナ禍の不安定な社会状況にあっても、多くの「小さな声」の叫びを聴きながら活動を続けていきます。

ピースメーカーズ募金

私たちは「平和を実現する人々は幸いである」をテーマに、一人ひとりがピースメーカー（Peacemaker）として平和を創り出す活動を展開しています。未来を見つめて、活動しようとする若い女性たちのリーダーシップ養成に、ご協力をお願いいたします。

オリーブの木キャンペーン募金（1口3000円）

日本YWCAは、イスラエル軍や入植者により脅かされるパレスチナの土地に世界中からオリーブの木を届ける、「オリーブの木キャンペーン」（パレスチナYWCAと東エルサレムYMCAの共同事業「JAI」が実施）を応援しています。あなたもパレスチナの平和を願って贈ってみませんか？一口3000円で1本の苗木を植えることができ、現地団体からの証明書が届きます。

※通信欄にお名前をローマ字表記で必ずご記入ください。

お振込み先

郵便振替 00170-7-23723

加入者名 公益財団法人 日本YWCA

*通信欄に「クリスマス募金（被災者支援）」「クリスマス募金（ピースメーカーズ）」「クリスマス募金（オリーブの木）」のいずれかをお書きください。

銀行振込 三井住友銀行 飯田橋支店 普通 1198743

口座名義 公益財団法人日本YWCA *下記のアドレスに①募金の種類、②お名前、③ご住所をお知らせください。

office-japan@ywca.or.jp

インターネット 日本YWCA公式サイトより、クレジットカードを用いてご寄付いただけます。

<https://www.ywca.or.jp/getinvolved/donate/>



（2022年8月16日）10月15日
敬称略

（カーロサポーターズ募金）
田崎桂子
カーロサポーターズ 56件

東日本大震災被災者支援募金
萩尾出穂 吉岡真紀子
匿名

（パレスチナYWCA支援）
賀来新子 嘉屋陽子 葉袋洋子
長尾隆 宮崎祐
公益財団法人大阪YWCA パレスチナ募金箱

（ウクライナ支援）
葉袋洋子 深野孟
静岡YWCA
一般財団法人 呉YWCA

（国内外の災害被災者支援）
嘉屋陽子 設楽順子
藤原玲子 吉野恵子
日本キリスト改革派東京恩寵教会

災害時支援募金
（平和を創り出す女性のリーダーシップ養成）
葉袋洋子 仁田裕子 藤原玲子
日本キリスト教団西が丘教会
学校法人横浜英和学院

（ピースメーカーズ募金）
阿部幸子 小野田照代 加納美津子
大工原則子 田中宏子 富岡美知子
萩尾出穂 藤原玲子 山田純子
みなも書房

ご協力ありがとうございます

発行所 公益財団法人日本YWCA 〒101-0062 千代田区神田駿河台1-8-11 東京YWCA会館302号室
Tel. 03・3292・6121 Fax. 03・3292・6122 office-japan@ywca.or.jp www.ywca.or.jp

編集発行人 実生律子／偶数月1日発行

旬な情報発信しています | メルマガ登録 y-net@ywca.or.jp | お名前を送ってください / フェイスブック www.facebook.com/YWCAJapan